



# 発掘調査で明らかになつた出雲国風土記の世界

『出雲国風土記』には、山や川といった自然だけでなく、当時のさまざまな施設や地域の特徴が記されています。近年の発掘調査の増加で、風土記に記された事柄を裏づける遺跡が数多く見つかるようになってきました。奈良時代の人が記した事実が、二二〇〇年後の今、掘り起こされているのです。

古代の遺跡と古代の文献の記述の一致を確認できるというのは、『風土記』の完本が残る出雲地方でのみ可能なことと言って過言ではありません。ここでは、『出雲国風土記』に書かれた奈良時代の施設などを今に伝える、遺跡の一部を紹介しましょう。

## 古代の役所

奈良時代の公の施設としては、出雲国を治める「国庁」(現在の県庁にあたる)が、郡ごとに置かれた「郡家」(現在の市町村役場にあたる)と税金である米などを蓄えておく「正倉」、軍隊の駐屯地である「軍団」などが考えられます。

『出雲国風土記』に記された方位や距離にかなう場所があり、そのうえ特別な建物巨大であったり、方位を東西南北に合わせている建物など(や特殊な遺物(文字が書かれた土器や木簡、日常生活では使われない遺物など)が出てくる場合、当時の役所である可能性が高いと言えます。

## 出雲国庁跡

神話に伝えられる「国引き」が終わり、最後に杖を立てられたという意宇の村の近く(現在の松江市大草町)に、出雲国の国庁が置かれた。整然と建てられた大規模な建物跡が見つかり、各地のさまざまな品物や木簡など、多くの遺物が出土している。



国庁跡出土の木簡

整備された出雲国庁跡



## 島根郡家跡

松江市福原町の芝原遺跡は、方向を東西南北に合わせた建物や墨書土器などが出土し、島根郡の郡家と考えられている。



芝原遺跡

## 出雲郡正倉跡

出雲郡の郡家に属する正倉と考えられる遺物が、神名火山である仏経山のふもとに斐川町出西後谷V遺跡から出てきている。米の重みに耐えるため、柱の土台に巨大な石が使われている。ここから、焼けて炭化した米もたくさん出土した。



後谷V遺跡

## 山代郷正倉跡

山代郷。郡家の西北三里一百二十歩なり。所造天下大神大穴持命の御子山代日子命坐せり。故山代と云ふ。即ち正倉あり。



山代郷正倉跡(左後ろは茶臼山)

松江市山代町では、当時の山代郷の正倉跡が発見された。一辺二メートル以上ある巨大な四角い柱穴に、直

## 伝説の地

風土記には、古来よりの伝説が多く記されています。出雲地方にはこうした伝説に対応すると思われる場所が伝えられています。伝説の真偽を含めてはたしてその場所と考えるのが正しいかを検証するのは難しいことですが、古代の伝説と現代をつなぐというのは夢があっても楽しいものです。ここでは発掘調査が行われた黄泉の穴と比売埼の伝承地を紹介します。

## 黄泉の穴

磯より西の方に窟戸あり。高さ廣さ各六尺許なり。窟の内に穴あり。人入ることを得ず。深き浅きを知らず。夢に此の窟の窟の邊に至る者は必ず死ぬ。故、俗人、古より今に至るまで、黄泉の坂、黄泉の穴と號くるなり。

黄泉の国に通じる黄泉の穴が、出雲郡宇賀郷の項に記されている。人がはいれないため深さわからないこの穴は、「この磯の岩穴あたりに行った夢を見ただけでもその人は死ぬ」とある。平田市猪目町の猪目洞窟と考えられるが、この穴からは実際に弥生時代や古墳時代の人骨が出ており、弥生時代の人骨には、遠く南海から運ばれた貝で作られた腕輪がつけられていた。

径五〇センチ前後の柱が据えられた建物が整然と並び、税を治める倉庫にふさわしい景観だったと推定されている。



発掘された山代郷正倉跡

## 生産の遺跡

『出雲国風土記』には、その土地の名産品が書かれていることがあります。ここでは玉作と焼物を取り上げます。

### 玉作

忌部神戸。郡家の正西二十一里二百六十歩なり。國造、神吉詞奏して、朝廷に参向ふ時の御沐の忌玉作る。故、忌部と云ふ。

玉造温泉周辺では、弥生時代から平安時代まで玉が盛んに作られていた。出雲の地元豪族の代表たる国造がその位につくときは、ここで作られた玉を持って天皇のもとに参上したようだ。現在、玉作遺跡は整備されて玉作史跡公園となり、工房跡が復元されたり、資料館もあり、玉を作る様子がよくわかる。(詳しくは巻末参照)



出雲玉作跡出土の玉作り資料

### 焼物

大井濱。則ち海鼠・海松あり。又陶器を造れり。

松江市大井町からは、当時の堅い焼物である「須恵器」を焼いた窯跡が集中して発見されている。古墳時代中ごろから奈良時代まで焼き続けられた出雲の須恵器作りの中心地だった。「出雲国風土記」に書かれた「陶器」とは、「この須恵器を指す。写真はその奥四号窯跡で、六世紀後半に造られたもの。長さ二〇メートル以上もある(詳しくは巻末参照)。



玉作史跡公園に復元された住居跡

## 寺院

奈良時代には、国家の政策として仏教が広められ、各国に官立寺院である国分寺をはじめ、多くの寺院が作られました。『出雲国風土記』には豪族が建てた寺院が二ヶ所記されており、そのうちのいくつかが発掘調査されています。(詳しくは巻末参照)

### 出雲国分寺

松江市竹矢町にあり、現在整備されて見学することができ。

『出雲国風土記』編纂直後に造営され、当時威容を誇っていたことは間違いない。



出雲国分寺跡出土の瓦(松江市竹矢町)

### 教皇寺

教皇寺。舍人郷の中にあり。郡家の正東二十五里一百二十歩なり。五層の塔を建立す。僧有り。教皇僧が造りし所なり。散位大初位下上蝦首押猪が祖父なり。



四王寺跡出土の瓦

即ち北の海に比賣埼あり。飛鳥浄御原宮御宇天皇の御世、甲戌の年七月十三日、語田猪麻呂が女子、件の埼に道違ひて、遡返に和爾(鰐)に遇ひ、賊はえて切りたれり。

## 比売埼伝承

意宇郡安来郷の地名伝承の中で、娘をサメに殺された男の復讐伝説が記されている。この娘の墓が、JR安来駅南の山上の毘売塚古墳と伝えられる。五〇メートルの大形前方後円墳で、中には舟の形をした石棺があり、剣や鉾、よろいなどが出土している。男性のものとと思われる人骨も出土した。



石棺から出た人骨



池の奥4号窯跡(松江市大井町)



発掘された四王寺跡

意宇郡山代郷南新造院。新造院一所。山代郷の中にあり。郡家の西北二里なり。嚴堂を建立す。住めし僧一、軀有り。飯石郡の少領、出雲臣弟山が造りし所なり。

松江市山代町にある茶臼山の南側のふもとにある四王寺跡が、これにあたると考えられている。発掘で基礎(建物の基礎の部分)が検出され、ま



塔の心礎



教皇寺出土の瓦



神社の土台となった心礎